

保育の専門性を高めるための研修の在り方を探る  
—— 一人一人への適切な援助をめざす ——

Explore the Nature of Training to Enhance the Professionalism of Childcare:  
— Aiming to Provide Appropriate Assistance to Each Individual —

久米 裕紀子

KUME Yukiko

武庫川女子大学 教育学部 教育学研究論集

第 19 号 2024 年

【研究ノート】

## 保育の専門性を高めるための研修の在り方を探る

—— 一人一人への適切な援助をめざす ——

### Explore the Nature of Training to Enhance the Professionalism of Childcare: —Aiming to Provide Appropriate Assistance to Each Individual—

久米 裕紀子\*

KUME Yukiko\*

#### 要旨

本研究の目的は、どのような研修が保育者の専門性を高めていくのかを探り、検討することである。「不適切な保育」という言葉が多く聞かれるようになり、保育現場では、保育者たちが「自分の保育が適切なのかと不安になる」という現象が起きている。子どもたちが、日々、喜んで登園しているか、子どもの育ちを見通し、常に自分自身の保育を振り返ることが大切だが、それを充実させていくことには努力が必要である。そのためには、一人一人の子どもへの適切な援助について、どのように関わることが望ましいのか、自分の保育について振り返る機会を十分にもつことが不可欠である。保育者間で保育について意見を交わし、確認すること、共有することは、保育者としての専門性を磨き合うことにつながっていくことだと考える。「不適切な保育」をどう受け止め、そこに保育者のどんな思いが足らなかったのか、何が必要なのかを考え合う研修会から、保育者自身の保育観、それぞれの視点、いろいろな考え方を学ぶことができる研修の在り方を考察していく。

**キーワード：**保育の専門性、不適切な保育、関り、グループワーク、共有

#### 1. はじめに

保育の専門性、保育の質の向上が求められる反面、「不適切保育」という言葉が多く聞かれるようになった。こども家庭庁が令和4年5月に行った全国調査の結果、実際に市町村が確認した件数は昨年4月～12月までに全国の認可保育所で914件、認定こども園などを含めた保育施設全体では1,316件あったと報告されている。そのうち「虐待」と認定されたケースは122件に上る。「虐待などが疑われる事実」を定めると共に防止や対応について「不適切な保育に対応するためのガイドライン」を公表した。各自治体、保育施設で「不適切な保育を考える」という研修が行われている。本研究では筆者の行なった研修から保育の専門性を引き出す取り組みを考察していく。原因として保育者不足により業務負担が重くなっていること、また、子どもの命を預かる者として保育の倫理性に問題があるという声も上がっているが、このような問題が起こる背景には様々な要因が複合的に影響を与え、保育者自身の問題ということだけで議論されるのでは十分な予防と解決には至らないと考える。

本研究の目的は、「不適切な保育」への対応などの流れを踏まえたうえで、著者の行った研修とアンケートの結

果から保育の専門性を引き出す取り組みを考察することである。保育者としての専門性を高めることや一人一人の乳幼児への対応、援助の在り方を学び合う機会を持つことが、保育者としての専門性、保育の質の向上につながると考える。なお本稿では「不適切保育」あるいは「不適切な保育」を「不適切な保育」に統一して記す。

#### 2. 厚生労働省の「不適切な保育」への対応

##### (1) 「不適切な保育」についての調査

厚生労働省は、令和2年度「不適切な保育の関する対応についての調査研究」を行った。子ども・子育て支援推進調査研究事業の報告書によると、不適切な保育に関する対応について各都道府県に実態把握調査（インターネット調査）を行った。47都道府県に発送し、回収は45都道府県、95.7%の回収率である。その後、不適切な保育の未然防止及び発生時の対応に関する体制や取り組み、現状の課題等について、より具体的に理解するヒヤリング調査を行っている。

聞き取りの要点は、

- ① 未然防止のための取り組みについて（具体的に）
- ② 不適切保育が疑われる事案の発生時の対応（具体的に）

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

- ③ 不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についてである。

## (2)「不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての手引き」作成

令和3年度、株式会社キャンサーズキャンが厚生労働省の調査結果をまとめた「不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての手引き」を作成、周知している。

## (3) 子ども家庭庁・文部科学省「不適切な保育」対応のガイドラインを制定（令和5年5月）

ガイドラインを受けて、各自自治体が、各々に調査を開始し、実態把握と対応を迫られることになっていく。全国保育士会が平成29年度に作成した「人権擁護のためのセルフチェックリスト」を活用し、子どもを尊重する保育について、各保育施設、各保育者が子どもの人権について改めて、考えていくことになった。それは、自身の保育観を見直し、自身の保育を振り返ることにつながっていく。

## 3.「不適切な保育」の定義について

### (1)「不適切な保育」の定義

厚生労働省が令和3年に公表した不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての手引きによると「不適切な保育」とは、

- ① 子ども一人一人の人格を尊重しない関わり
  - ② 物事を共有するような関わり・脅迫的な言葉がけ
  - ③ 罰を与える・乱暴な関わり
  - ④ 子ども一人一人の育ちや家庭環境への配慮に欠ける関わり
  - ⑤ 差別的な関わり
- と、定義されている。(1)

### (2)「不適切な保育」の要因

「不適切な保育」が行われてしまう要因として、

- ① ストレスが大きい
- ② 人手不足で過重労働
- ③ 保育園の指導方針が行き過ぎている
- ④ 保育士のスキル不足

などが挙げられるが、どの理由も「不適切な保育」を行ってもよいということにはならない。しかしながら、①②③の要因に関しては、人手不足からくるストレス、保育園の指導方針の行き過ぎから過重労働になるなど、各要因が連鎖していることが考えられる。④のスキル不足という要因は、保育者自身が保育について学ぶこと、研修会などへの参加の機会をもつことで、スキルアップをめざすことが解決へつながると考える。保育の専門性

を理解し、自分の保育を考え、保育の質向上につなげるために「不適切な保育」がどのような場面で起こるかを理解すること、目の前の子どもをしっかりと見て自分自身の保育を見つめ直すことをめざして自己研鑽をしていく必要がある。

## 4. 調査の方法

### (1) 研究協力者・調査の手続き

筆者は、A市の保育施設の保育者を対象に「不適切な保育」を考える研修を行った。研修を井際された際に、研修に参加希望の保育士・保育教諭が「不適切な保育」を含めた、保育に関するアンケートを実施した。

対象はA市の公立認定こども園・保育所、私立認定こども園・保育園など市内の保育施設である。調査の内容は、①保育は楽しいか、②自分のめざす保育は何か、③自分の保育の中で適切か不適切かを考えたことがあるか、④保育に関する悩みの有無、⑤保育に関する相談をするか、誰に相談したのか、⑥不適切な保育をしないために必要なこと、である。集計されたデータは単純集計で分析した。

この結果を踏まえて、研修内容は、不適切な保育とは何か、不適切な保育に関するグループワークを実施した（詳細は後述）。研修は、保育者同士が意見交換をし、学び合う場面や、各グループのまとめの発表より考察していく。

### (2) 倫理的配慮

個人情報保護法の観点から会話・話題内容において個人ができる表記は累計型の過程で削除しデータの扱いや論文公共時に調査対象が特定されないよう研究結果を表にまとめた。また、A市子ども福祉部子ども家庭室はいく課の承諾を得ている、さらに、保育研究の在り方という研究として、武庫川女子大学倫理審査（No23-16）で承認を得ている。

## 5. 事前アンケートの分析

事前アンケートは各保育施設から180名分が回収された。

### (1) 保育の経験について

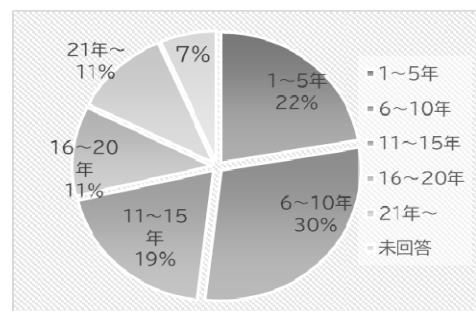


図1. 保育の経験年数

保育の経験を見ると、このアンケートには、初任者から 35 年以上のベテラン、管理職を含む。全体的にまんべんなく様々な経験の方の協力を得ることができた。

## (2) 担当している年齢

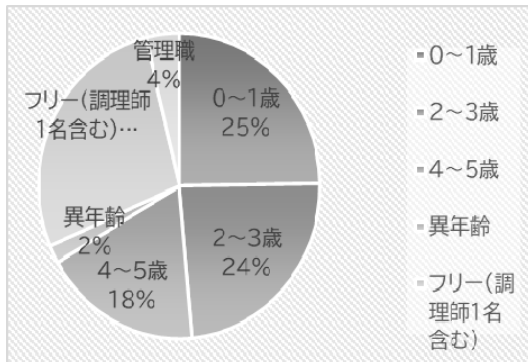


図 2. 担当年齢

担当年齢も偏りなく、どの年齢にも担当者がいることが分かる。

## (3) 保育は、楽しいですか？（複数回答有）

表 1. 保育は楽しいですか (108 人)

a.とても楽しい	28
b.楽しい	79
c.楽しくない	1
d.苦痛に思うことがある	4

表 2. 保育は楽しいか？その理由は (1 部抜粋)

とても楽しいではなかったのは楽しいことばかりではなく悩み反省すること多いから。	F
子どもと過ごすのが楽しい。	B
子どもの嬉しい気持ちを共感することができるから。保育を通してたくさんの大人子どもと関わり人として成長することができるから。	DB
施設の作りがすべての子ども中心であり保育がしやすい。クラスの子どもの人数が少なく一人一人とじっくり関わられる。	E
子どもと関わって遊ぶことができるから。成長を見守りつつ一緒に過ごせるから。	BA
後輩に恵まれている。フリーとしての動きを学び、事務作業と保育をし、スキルアップができています。攻撃的、威圧的な職員がいない。	CB
自分の保育で子どもたちが楽しんでいる姿が見られるから。	B
初めて一人担任を持たせてもらい今は、いっぱいですがやりがいのある仕事だなと思うため。	B
幼児クラスを中心に各クラスに入るため各担任に様子を聞いたりお互い意見を伝えながら保育したり様々なクラスの子どもたちと関わることができるため。	OE
自分のやりたいことを表現できた時が楽しい。	B
子どもたちがする仕草ややり取りするととても面白く子どもたちの笑顔が見られると楽しく嬉しいです。	B
子どもたちと一緒に過ごす中で喜んでくれることがとても嬉しい。	B
愛着が生まれた時自分とその子だけの関わり方で意思疎通ができていと楽しい。	B
毎日さまざまな表情や成長を見せてくれる子どもたちと一緒に過ごせるから。	AB

大変なことも多いけれど 子どもたちと一緒に遊ぶのは楽しい子どもたちだけでなく保護者の方ともコミュニケーションをとることで少しずつ信頼関係が築けているのか子どもの成長を共有し一緒に喜ぶことができるのがうれしいから。	BAE
子どもたちが見せてくれる笑顔に、日々癒されています。毎日子どもと笑って過ごせるから。「〇〇先生と呼んでくれることがうれしいから。	B
保育をする中で悩んだり困ったりすることもあるがそれに気づいて声をかけてくださる同僚や先輩がいて幸せだと感じています。	D
子どもの成長をそばで感じるから。	A
子どもたちと話ができたり遊んだりできるから。自分の関わりで子どもたちが喜んでくれたらうれしい。	B
自分の経験年数も増え先を見通しての保育はしやすくなった。職場もやりたいことをやらせてもらえる環境で好きな保育ができる。	AE
働いていれば大変なことやしんどいことなどもあるので楽しいだけではない。年々、気をつけること（常に意識はしているが）が増えている。	F
* 保育以外（行事準備や作業で）のことでいっぱいになることもあるから。	F
* 思うように保育を回すことができないなど自分の反省があると楽しくないと感じてしまうことがある。しかし子どもと楽しめる時もあると楽しいと思うこともある。	F
子どもたちの成長からいろいろなことを学び生き生きと活動している姿を見られることは保育者の喜びであると思うから。	A
子どもたちの成長を見ることができるから。	A
悩むことはあるが子どもたちの成長を日々見守ることは楽しいと感じる。	A

保育がとても楽しいという回答は 69%, 楽しいという回答と合わせると 95%の保育者が保育という仕事を楽しいと思っている。d の苦痛に思うことがあるという回答には、楽しい時もあるれば、保育に悩み楽しくない時もある 2 件、とても楽しいが体に負担なことがあるという回答 2 件、楽しいと思いながらも経験と共に責任や仕事量が増えて保育を楽しむ余裕がないという意見があり、保育現場の現実も感じられる。

その理由については、A 子どもの成長・B 仕事のやりがい・C 人間関係・D 共感・E 環境・F その他のカテゴリに分類した。

表 3. 保育が楽しいと思う理由を 6 つのカテゴリに分類

保育が楽しいと思う理由		
A	子どもの成長	40
B	仕事のやりがい	55
C	人間関係	14
D	共感	8
E	環境	7
F	その他	11

保育者は、子どもの成長を喜び、仕事のやりがいを感じることが保育の楽しさだと考えていることがわかる。人間関係で協力する、認め合うことで支えられていることが、保育を行ううえで大きな支えとなっているといえる。

## (4) 自分のめざす保育について

次のような回答があった。

- ・子どもが楽しいと思う（保育者も楽しいと思う）
- ・子どもの興味を引き出す
- ・子どもの成長をめざし、自分も学んでいきたい
- ・安心して遊ぶ（ゆったり関わる）
- ・子どもも保護者も笑顔になる
- ・一人一人に寄り添っていく（発達や性格に合わせて）
- ・子どもも保育者も笑顔になる
- ・保護者から信頼される
- ・心が豊かになる、子どもが生き生き、のびのびする  
心も体も満たされる

などの回答があった、子どもの姿を応援し、援助していく保育をしていこうという保育者の思いを感じた。

## (5) 自分の中で、これは適切なのか不適切なのかを考えたことがあるか

表 4. 保育の中で不適切保育について考えることがあるか

a. よく考える	25
b. 考える	51
c. たまに考える	29
d. 考えない	3
無回答	0
計	108

「不適切な保育」はニュース報道で取り上げられることが多くなり、その度に「どうしてこんなことが起こるのか」「自分の保育は大丈夫だろうか」と心配になることが以前より増えていることがわかった。

## (6) 保育について悩みがあるか

表 5. 保育の悩みについて

a. たくさんある	21
b. ある	51
c. 少しある	32
d. ない	2
無回答	1
計	108

## (7) 保育について、誰にいつ、相談するか

保育についての相談は、同僚、先輩、園長先生と職場の中で話をすることが多いことがわかったが、何時相談をするかという問いには、午睡、休憩中、タイミングを見て、隙間時間という回答が多く、じっくりと話す時間の確保は難しいことがわかった。

令和 5 年 5 月 子ども家庭庁「保育所等における虐待等の防止及び 発生時の対応等に関するガイドライン」においても、職場環境の問題は取り上げられている。(2)

例えば、職場において保育士間で日々の保育の振り返りを行う機会などを定期的に持っていれば、未然に不適

切な関わりを防止できたり、不適切な関わり に陥っていたとしても早い段階で改善されたりすることが期待できるが、そうした 機会がない場合、保育士同士の気づきが促されないなどの弊害が考えられる。

保育のことを相談したり、話し合いをしたりする時間が十分にとりにくい現状を改善していくことが不可欠であると考えられる。保育や子どものことについて、話をする時間をどのように増やしていくかを検討していくことが、保育の質につながってくることなので、重要な課題である。これは「不適切な保育」を防ぐために必要なことである。

## (8) 「不適切な保育」をしないために何が必要なのか

「不適切な保育」をしないために必要だと考えていることを A 余裕（心・身体・時間）、B 人員確保（時間）、C コミュニケーション（相談）、D 保育を見直す（研修など）、E 子ども理解の 5 つのカテゴリーに（表 6）に分類する。

表 6. 5 つのカテゴリーに分類

不適切保育をしないために必要なこと		
A	余裕（心・身体・時間）	46
B	人員確保（時間）	7
C	コミュニケーション（相談）	49
D	保育を見直す（研修など）	60
E	子ども理解（保育力）	49

表 7. 不適切保育をしないために必要なこと（1 部抜粋）

肯定的に捉え気持ちに寄り添いながら関わる	E
余裕を持つこと、気持ちにも準備にも余裕を持つこと	A
正しい知識職場内のコミュニケーション、チームワーク	C
時間や人手の余裕 職員間の連携	BC
知識・イメージ・冷静さ・愛情・経験・余裕	ADE
保育士の事務時間の確保	B
子どもの意思や思いを尊重する、人を傷つけてはいけないことをしっかりと伝える 子どもに寄り添う目線に立って考える	E
研修、所長・園長・主任はタイミングを見て巡回・指導する	CDE
全体が理解できるよう話し合う（丁寧な言葉がけ関わり保育）	CE

多くの保育者が、日々の保育を見直し、子ども理解、保育力をつけることが必要だと考えていることがわかった。余裕をもつこと、相談する時間をつくり保育を見直し考える時間が必要だということから、保育をしっかりと考えるための心や時間の余裕がない状況が見えてきた。研修や保育を考え合う時間や保育観を共有することの重要性を感じた。

この結果を受けて、自分の保育観を語ることで、学びを共有することをめざし、「不適切な保育」の研修として、「保育の専門性」を考え合うことにした。



## 6. 研修会「保育の専門性」～ 不適切な保育への意識をもつ ～を通して

研修会は、5月29日(月)18:00～20:00に開催された。参加者は約45名。研修会の内容は、「不適切な保育」として取り上げられたA市の事例を含めて、「不適切な保育育」を理解するために内閣府の「不適切な保育」の資料を基に説明し、その要因についてそれぞれの保育観を話し合った。要因の中でも保育士のスキル不足に着目してグループワークを行なった。

### (1) 保育者の関わり、援助の仕方を探る

実際に「不適切な保育」として取り上げられた事例10件を基に、グループワークを行なった。

事例を挙げると、「こんなことが?」「こんなことも?」という声が聴かれた。「不適切な保育」をしようと思っていなくても、してはいけなと分かっているにもかかわらず実際に起こりうる身近な事例である。他人ごとではなく、身近に起こりうることから、子どもへの関わり方、声の掛け方を具体的に出し合いながら、保育について学び合う時間を設けた。

グループは5～6人ずつくらいに分かれて、背景やその幼児の性格、発達など考えられることを出し合いながら、意見交換を進めていった。

(保育者の援助: 下線 , 体制: 二重線 で示す)

### 事例1: 片付けない幼児に対して「わかった」「ずっと遊んでたらいいい」と強く言った。

なぜ片付けたくないのかをその子の思いを考える。もっと遊びたいのか、片付けをしていることを気付いていないのか、その状況で関わり方が変わる。もっと遊びたいのであれば、その気持ちに共感した言葉がけをする。片付ける少し前から、もうすぐ片付けることを伝えておくなど、見通しをもたせること。片付けをしている他児を認める。片付けをどっちが早く片付けられるかなど競争のような遊びにする。片付けができたら誉める。

子どもの気持ちについて意見が交わされていた。その子がどう思っているかを受け止めて関わっていくことが必要だと共有していた。

### 事例2: 幼児が何度も話しかけているが、他の用事をしていたので応えなかった。

忙しくて気付かないこともあると思うが、子どもの方へ気持ちが向く余裕がなくなっているのではないかと。職員間の協働体制。直ぐに対応できなくても、「待ってね」と言葉がけたり、頷いたりして、返して、用事が

済み次第、待っていてあげてと声をかける先生でいたい。

保育中は、忙しくてすべてに対応することはできないこともあるが、自分本位に動いてはいけな。子どもを中心に据えて、考えていく姿勢が必要だと確認し合った。

### 事例3: 抱っこを求める1歳児に対して、別の幼児を抱っこしていた為、拳で強く押して拒んだ。

立って2人を抱っこすることは難しいが、座って左右の膝に一人ずつ乗せて抱っこする。甘えたい気持ち、先生に抱っこされたいという気持ちを受け止めることが必要である。順番に抱っこする。スキンシップを普段の遊びから持つことを心がける。

どの子どもも分け隔てなく関わる大切である。こんな時、自分一人だから仕方ない、できないと考えるのではなく、相談をし、いろいろな手立てを考えていくことが必要だと確認していた。

### 事例4: 寝つけずに話をしているとされる4歳児の腕を引っ張り、上半身を持ち上げその手を放し、頭を叩いた。

4歳児なので無理に寝かせるようなことはしないで、落ち着けるようにそばに行って話を聞く。周りのみんなが寝ていることを伝える。今、静かにしないといけないことを伝えて静かにすることを約束する。保育士に構って盛りたいアピールかもしれないので普段の関わりをしっかりとしていく。

一人一人の発達や状況もあるが、午睡についての考えを園で話し合い、どう見守っていくかを検討していく必要があるのではないかと。いろいろな考え方でそれぞれの保育者が子どもに対応するのではなく、統一していくことも必要だという意見が出ていた。

### 事例5: 机の上に座る1歳児に対して軽くお尻を叩いて、机から降りるよう促した。

まず安全に下ろす。抱っこをして下ろす。机の使い方を伝える。机はご飯を食べるところ、制作をするところだから登らないよ、机から落ちたら危ないよということを説明したらわかりやすいのではないかと。な実際、なぜ持座りたいのか理由を探っていく。とにかく何かに座りたいというのなら椅子に座ろうねと声をかける。机に登りたいという気持ちが強いようなら、登れるような遊びを提案してあげてそっちに行こうねと促す。

1 歳児ということもあるが、何故、登っているのか、その子が何を考えているのか、気持ちを汲むことが大切であることを共有していた。

**事例 6：寝付けずに話している 4 歳児の腕をはたいた。**

背景として考えられるのが、叩くという表現がトンと合図をしたのか、これだけでは分からない。

4 歳児ということなので声を出さずに他の子どもを起こさないように伝える方法を取ったのではということも推測されます。4 歳児だからこそ、「分かっているでしょう？」というサインだったのかなということが推測されました。ただやっぱり 4 歳児だと午睡がいらぬ子もいるという点において、一人一人を理解するという点では、要支援児かもしれないので、配慮が必要かもしれない。寝られないのであれば静かに過ごせるような環境を整えていくことが大切であったのではないか。

事例 4 と同様に、午睡についての考え方を園で確認していく必要があるという意見でまとまった。

**事例 7：話を聞いていない 3 歳児に対して、何度か注意したが聞かないので、保育室の外に出した。**

一人で外に出すのは不適切だと思う。一人保育士が部屋の中、もう一人の保育士が部屋の外でその子に対して 1 対 1 で関わり、話を十分に聞いた後、部屋に戻るとそれは不適切ではない。

その話が注意するほど聞いてほしい話だったのか、聞いてほしい話であって設定保育を進めたいのであれば、何か保育者の工夫が必要ではないか。

一人で大人数の子どもを見ないといけないという状況は、口調がきつくなってしまうこともあり、人手が必要ではないのか。

保育者としての力量や保育の工夫が必要であるという意見が多かった。保育者の思い方、考え方の柔軟性が求められる。

**事例 8：トイレに向かう 4 歳時に速やかに戻ってくるように話しかけた際に頭を叩いた。**

速やかに戻ってくるように言うのは、活動前にもう一回お集まりして活動伝えるためなのか。園では活動の前に話をしてトイレに行くことがあるが、こんな活動するよ、みんなが待っていることなどと言葉がけをして、次はこういう遊びをするからということを伝えることが必要ではないか。4 歳児は、トイレで遊んで

しまうことがあるので担任一人では目が行き届かない場所でもあるので改めてトイレの使い方や目的を子どもに分かりやすく伝える。ゲーム感覚で、何秒で戻って来られるかな？というふうに競争のようにしたり、視覚的に分かりやすいように時計に印をつけて見て分かりやすくする工夫はどうか。頭を叩いたりすることはしてはいけないことなので、が一人で見ているという背景が考えられるので上の職員が声をかけ、話を聞くなど、保育士のケアも必要だと思う。

勤務体制的なこともあるが、保育者同士のコミュニケーション力の大切さを確認し合った。

**事例 9：給食を食べるのが遅い 2 歳児に「早く食べかい」と怒鳴った。**

給食を食べるのが遅い理由が、量が多かったのか、苦手なものがあるのか、遊んでしまっとなかなか食べられないのか、いろんな背景があると思う。その子どもの育ちの課題なのか、未熟さの中で食べられないのかなどの見極めも大切だ。毎日、給食は食べるのが遅いのであれば、大人側の食べさせる手立てを変えていく必要があるのか、食材をちよつと小さく刻む、ご飯をちよつとおにぎりみたいに丸めてみる、座っている位置でちよつと視界を狭めてあげることなどが大切かもしれない。ただ、その日だけがすごく遅いのであれば、体調が悪いのか、朝ごはんをたくさん食べてきてお腹が空いてないのかなど、体調や様子に合わせて無理させず、今日はここまでにしようかで見切りをつけてあげることも大事なのではないか。

食べることが楽しい時間となるよう考えていく必要があるという意見が出て、「食べることが好き」「どんな味がするのか」と職に興味をもてるように関わり方をめざしたいと確認し合った。

**事例 10：給食を食べるのが遅い 3 歳児の口にスプーンで押し込みながら食べさせた。**

食べることが遅い理由を探ることが大事だと思う。苦手なものがあつて遅くなるのなら、苦手なものは一口だけにして、食べたれたら大丈夫っていう声かけをする。少しでも食べられたら誉める。認めて誉めると意欲につながると思う。日々の関わり方を食事に意欲的になれるように関わっていくという意見があつた。給食を食べるのが遅い理由が、しっかり咀嚼しているからであれば、それは誉め、もしお腹がいっぱいで遅いのであれば早めに切り上げてあげることも大事な

と思う。グループで前半後半に分かれて食事をするのであれば、前半グループに入れて、後半グループと一緒に終われるぐらいの時間が取れたらよいと思う。最初は食事の量を減らして完食できたことをほめて、食べられるようになったら増やしていく。苦手な食材があつて遅いのであれば、それをクッキングするなど興味を持って食べることができるような工夫をしていく。食べることに集中できないのであれば、静かに食べているグループに入れる。保護者と連携も大事だと思う。

保育者の状況判断力、その子への願いなど、感情で流されることなく、対応することが専門性であると確認し合った。

## (2) グループワークの学びより

事例として、書かれている内容は1～2行である。「不適切な保育」として、そこからどういうことが考えられるのか、何が不適切な保育として取り上げられているのかなどを考え、話し合っていくことで保育者としての専門性や気持ちを確認することができた。子どもの気持ちを汲み取ること（子ども理解）、不適切な保育は絶対にしないという保育者としてのプロ意識を持つことが重要である。不適切な保育が起こった背景、真実はどうであったかわからないが、わからないで済まらず、何が考えられるのかと思い巡らせていくことが、「不適切な保育」を許さない気持ちや保育の専門性を高めていくことにつながっていった。どんな理由があっても、不適切な保育になることは、あってはならない。その気持ちを共有することも、保育者として、必要な機会だと考える。

グループワークの中で、背景や状況について、なぜ、どうしてということが保育者間で協議されていった。背景、状況を自分の職場と照らし合わせて、推測して考えているところも見られ、他園の保育者の話から、その子どもの発達について、配慮について考え、保育者の関わり、言葉がけ、保育の内容と、具体的に保育の中で「どうしていくか」という話がたくさんできた。経験年齢のいろいろな保育者同士が、それぞれに意見を語り合う場は貴重な時間である。「保育を考える」ことは、保育の質の向上につながっていく。それは子どもたちの生活、遊びの充実につながっていくことでもある。事前アンケートから、話をすることの必要性は保育者の方々も分かっているし、望んでいる。保育の話を目と向かって、語り合う機会が必要であることは間違いない。

## 7. 今後に向けて：保育の専門性を追求する

### (1) 子ども一人一人に寄り添った関わり方

グループワークの内容の下線\_\_\_\_\_の部分は、その子どもの気持ちに寄り添うための関わり、言葉がけなどの援助を示している。保育者の方から、その子が何を思っているのかと探っていくことが寄り添うことである。秋田喜代美氏は、子どもの経験から考える保育環境と活動として、子どもが安心できること、そこから夢中になって遊びに向かうために、保育者が関わりそのための環境を保証していくことが必要だと述べている。

子どもの経験から考える 保育の活動と環境の質	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安心感・居場所感を保証する環境</li> <li>1 身体が休まる</li> <li>2 一人や仲間うちだけ居られる</li> <li>3 大事に見守られている感覚（温かさ、自然との共生）</li> <li>4 私、私たちの場の感覚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 夢中になることを保証する環境と活動</li> <li>1 関わりたくなる</li> <li>2 利用しやすい</li> <li>3 続けたいくなる</li> <li>4 足跡がある 振り返り見通しができる</li> </ul>

図 3. 保育の活動と環境の質

### (3) 保育を考える研修会

保育現場は、人手不足である。そのことが「不適切な保育」の理由としては認められないが、保育者の心の健康は、子どもへの関わり方に現れてしまうことはありうる。表 8 は、保育者が一人当たり何人の子どものを見るかという基準である。

表 8. 保育者一人当たりが見る子どもの数（上限）

	日本	OECD
3 歳	20 人	18 人 (参加 19 か国)
4 歳	30 人	
5 歳	30 人	

OECD の調査から、世界の中で 日本の配置基準の違いがよく指摘されるが、保育の質は、保育者一人が見る子どもの数で変わってくるのではないかと。保育の専門性を高めていくという研究の中で、この問題は常に付きまとっている。異次元の子育て支援を掲げている我が国の現実には厳しいと言える。

岡花 (3) は、「不適切な保育」が生まれる構造として、「保育士不足」「時間的・精神的な時間の余裕」保育者がいつも限られた制約の中で多くを求められていると述べている。保育の現場の体制が過酷といっても過言ではない現状ではあるが、保育者の視点から「不適切な保育」を考えていく、保育者間の連携の強化と保育の質の向上のための研修会や研究会は不可欠である。保育者同士が学び合う機会、共有の充実は、今後の大きな課題である。



体制が過酷ではあるが、保育者間の連携の強化と保育の質の向上のための研修会や、研究会は不可欠である。保育者同士の学び合う機会、共有の充実が大きな課題である。

保育を具体的にどうしていくか、どう考えるかを話し合うことが保育力の向上につながっていくと考える。

アンケートでは、自分の子どもへの援助や関りなどを考える、例えば「しつけ」が行き過ぎていないか、その子どもに合わせて接することができているのだろうか、自分の保育に自信が持てなかったり、間違いはないかという不安を抱いたりすることが増えたという意見があった。保育者が日々の保育を省察して、学び合う機会を持つことがかなり重要であると感じた。その機会が、子どもを園全体で育てていくという体制を強化していくことにつながっていくのである。だからこそ、保育者が日々の保育の中で様々な学び合う機会を作り、研修会、研究会などで「不適切な保育」に対する意識を持ち、保育者としての専門性を高めていくという志を新鮮に持ち続けること、保育者同士の連携、共有していくことが必要である。保育のプロとしての意識と、謙虚に学び合うこと、明日の保育に活かされ、子どもの育ちを保証していく保育の営み、そのような循環が生まれることを望んでいる。

#### \*補足

研修会后、主催者が参加した保育者に感想アンケートを行った。40枚が回収された。全て「わかりやすかった」という評価であった。以下、感想の抜粋を記す。

- ・ 「不適切な保育」というテーマを、「保育の専門性」という視点で考えたことが、分かりやすく、身近なこととして考えることができた。
- ・ 普段の保育の見直しにつながった。
- ・ この研修会は、公立、私立などいろいろな保育園、こども園の保育者が集まり、一緒にグループワークをしたことから、いろいろな経験年数の保育者の話が聞くことができ、ストレートに学び合う機会となった。
- ・ 保育の話をする事、いろいろな考えを知ることができたので今後に生かしたい。

#### 注

- (1) こども家庭庁（2023）「保育所等における虐待等の防止及び発生時の対応等に関するガイドライン」  
[https://www.zenshihoren.or.jp/uploads/topics\\_download/20230512164736.pdf](https://www.zenshihoren.or.jp/uploads/topics_download/20230512164736.pdf) p5
- (2) 同上、p6
- (3) 岡花喜一郎（2023）「不適正保育はなぜ起こるのか」（学会企画シンポジウム）『日本乳幼児教育学会第33回研究発表論文集』、p15-16

#### 参考文献

- (1) 全国保育士会平成（2017）『保育所・認定こども園等における人権擁護のためのセルフチェックリスト』～「子どもを尊重する保育」のために～  
<https://www.z-hoikushikai.com/about/siryobox/book/checklist.pdf>
- (2) 秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊（2010）『子どもの経験から振り返る保育プロセス』幼児教育映像制作委員会事務局
- (3) Lillard（2013）The impact of pretend play on children's development:A review of evidence. *Psychological Bulletin*,139（1）, 1-34.
- (4) Diamond & Lee（2011）How can we help children succeed in the 21st century? The scientific evidence shows aids executive function development in children 4-12 years of age. *Science*,333,959-964.
- (5) Hedegaard,M.（2012）Analyzing children's learning and development in everyday settings from a cultural-historical wholeness approach. *Mind, Culture and Activity*,19,127-138.
- (6) 秋田喜代美（2014）「子どもの「遊び」をはぐくむ保育者－育ちを見通した」「遊び」の多様性－』『CRN活動レポート 2013 - ECEC 研究と東アジア子ども学交流プログラム報告書 - 』チャイルド・リサーチ・ネット pp.30 - 33.